

スーヴニール

伊藤眞理子

はい おみやげ と

父親から幼い娘のてのひらに渡された

「コーヒーハウス ほびっと」の広告マッチ

白地に 赤い三角帽子のこどもの画

豆本のえほんのようなデザインで

サインに「チョウ」とある。

子どもだった頃の敗戦から二十五年

勝った国が

いままたベトナムで

雨のように降らしているのは

プラスチック爆弾 ボール爆弾 枯葉剤

いまにも水素爆弾が

きのこ型の雲をつくるのではないか とうとうとき

基地イワクニの片隅に

京都からきた若者が

喫茶店を開いたという

軍規に従う ひと殺しのための整列から

ひと足 東へ足を踏み出せば

逃げ道の洞窟があり



■詩の作者の紹介■

いとう・まりこ

1938年、現北九州市小倉北区に出生。49年、鹿児島県の母方祖父母宅で育つ。鹿児島県立短期大学卒。61年～2004年、広島市に在住。67年、詩誌「火皿」同人、2004年上京と共に退会。2007年、詩誌「タルタ」創刊に加わり、現在に至る。

著書『伊藤眞理子詩集』（近文社）、共著 詩画集『あしたきらきら』Ⅰ・Ⅱ（スニッケル社）、『ヒロシマ、ナガサキからフクシマへ』黒古一夫編（勉誠出版）。日本社会文学会会員、戦争と平和を考える詩の会会員 他

入口は「ほびっと」という噂

敗けた国の若者が道案内をするという
軍もアンポも「ほびっと」をとり囲んだ

何ができるというのだ

たった一杯のコーヒーをのみに

とにかく行ってみるよ

気をつけてね

娘と、その父親を見送った

わーい

『どろながダック』のおじさんマツチ

「ほびっと」に行ってみたいという娘がいう

チョコレートサンデーであるといいね

みんなでイワクニに行った

日曜日の夕方だった

「ほびっと」のドアは開かなかった

なぜだか 黙秘しているように閉じていた

『ベトナムから遠く離れて』と思想家がいった

白いアオザイをひるがえして解放二十年を祝う女たちの映像

そして イワクニの電話番号のある 広告マツチ

▼ 表紙絵の作者 ▲



高橋 助幹

(たかはし・すけもと)

1918(大正7)年5月23日、茨城県行方郡香澄村に生まれる。1938(昭和13)年4月東京美術学校(現東京芸術大学)日本画科に入学、1942(昭和17)年9月繰り上げ卒業。同年12月水戸連隊に入営し、1943(昭和18)年6月、結核のため陸軍病院に入院。除籍後、小学校の代用教員として勤務するが、病気が再発する。闘病中に妻・百恵との間に一児をもうけるが、1945(昭和20)年12月5日病死。享年27。